

はじめに

書法史の二大潮流

中国書画史を俯瞰した時、そこには工人による史観と文人による史観の二大潮流の交差を確認することができます。書法史として概観すれば、その工人の仕事とは北宋以前の、話し手と書き手が分離した時代の書き手の仕事であり、そして文人とは漢詩人自らが書す書の流れと換言できるでしょう。つまりそもそも春秋戦国期の刀筆の吏の時代から、清書者、その文字造形の書き手の仕事、書家の仕事であり、それは発話者、文学者とは違う領域の仕事だったのです。

一方、書が文人の仕事となり、形而上の精神に価値があると評価されたのは、六朝期の王羲之、北宋期の蘇軾などの作品が代表的で、書の形状の裏面には形而上の目には見えにくい虚の価値の世界が認められました。

この古代の工人史観と文人史観の攻防が、書法史の暗闘の真実なのです。

例えば、文人史観で言うくと、元の趙孟頫はその工人性から奴書とされ、逆にそれよりも精神性を高らかに謳った明の董其昌が顕彰されることが多い書論史の趨勢は、本当に正しいのでしょうか。

工人すなわちカタチと、文人すなわち精神に於いては、一般的に精神側が優位の歴史にあります。例えば日本では、江戸期は文人の時代でしたが、明治期の阮元の北碑南帖論の流入によって、その書の工人化、大衆化が推進され、それを基底とした芸術書道が發展しました。換言すれば、はじめは精神よりカタチを重んじ、その模倣から始め、最後は文人的に精神化し、芸術へと昇華させるとというのが、近代日本書道史の骨格なのです。

一方、中国に目を転ずると、文革期などは、文人より工人の書が推奨されています。

言葉に随伴する墨書美とは、無論、文人史観のそれであり、ことばと分離した文字作りが、工人的書家の仕事であれば、逆に文字が読めずとも、書が美しければいいとも言えるでしょう。

これらの思想の反映として、臨書があるとするれば、唯物的臨書と精神的臨書に二分できます。

旧中国の書道の潮流は、精神化にあります。ここで足を止めて、工人的な書の写実的価値にもスポットを当てたいと思います。なぜなら、そのような着眼は、特に文革期、文人・郭沫若にも顕著であったからです。

行書と自作詩の行方

さて、本書のテーマである郭沫若の書の世界に入る前に、話し手と書き手が統合される北宋期辺りについて、まずは言及しておきたいと思います。

私説になりますが、楷書（工人）、草書（文人）が支配的であった中世中国に、突如、唐代から行書が出現する理由は、科挙試験の詩賦の様式に用いられたからだと考えられます。

無論、行書も西晋の書論『四体書勢』に見られますが、それが書論史の表舞台で伸び悩んだのは、公の使い道がなかったからだと言えないでしょうか。

つまり、詩賦の表象として、科挙試験に用いられたことによって、市民権を得たのだと考えられるのです。

そしてその雛形の中心に、王羲之の「集字聖教序」が用いられました。顔真卿にしても、宋の四大家にしても、郭沫若であっても、皆その洗礼を受けています。

因みに、郭沫若の提起した、蘭亭序偽作説の問題も、この時代事情に隠されていると考えられます。詩賦と書。つまり当時あって書が文学となり、時代への、社会への告白の表象となったのです。換言すれば、書は漢詩の「書き

方」となります。蘇軾や、黄庭堅がその思いを告白したように、郭沫若は何を告白したのでしょうか。

近現代中国の文人観と金石学

北宋期には、二度目の文人（精神）観の変革が行われましたが、一度目は王羲之の書の瞑想による「気韻（天然）の発見」、二度目は蘇軾らによる「人格の投影」としての書の発見に他なりません。

これらの文人観は、主に行草書に委ねられ、明の董其昌で結実しています。但しこの文人観は、「封建制」を支える人格論であったために、共産主義者の郭沫若にあつては、初期にはその影響があつたとしても、蒋介石との訣別以降は、放棄されました。

当時の中国の書法に於いては、工人（大衆）史観の金石学の書と、保守（封建）派の文人史観の書の他に、第三の道が摸索されており、それを果たしたのが、郭沫若だったのです。

口語の表出と告白

文学に於ける文語（貴族語）と口語（人民語）との争い、つまり「文白の争い」は、書の表象にも影響を与えました。

郭沫若が自ら「私の書は、「口語の表象」である」と述べたように、これは共産主義の書の象徴的な運動であったのです。抗日戦（日中戦争）期にその文語と口語は融合され、それは、郭の最晩年まで続くこととなります。

しかし、主に行草書で書されている郭の書は、ここに大きな矛盾が内包されていたのです。それは、人格論（上下関係・貴族性）と口語論（共産化）の葛藤と矛盾の問題です。

書法風格史の影響を受けた書人であれば、誰もが拭い切れない問題であり、あの毛沢東の書でさえ、例外ではな

かったと考えられるのです。この問題については、以降、本書で詳しく述べます。

プロパガンダと演出

さて、プロパガンダとしての書は、歴史的に存在したのかという問題もあります。

無論、王羲之の書が宮廷に奉仕したこと、清の乾隆帝の書がプロパガンダの役割を担っていたことは事実で、それらはある種の強い政治性を内包していたと言えるでしょう。

作品とは、書に限らずとも作家固有の発想に始まって、それが時代を支配する発想となる場合があり、それも作家としての成功なのかもしれません。

付言になりますが、実は郭は、画（南画）の作品も残しています。

ただ書の場合は、歴史芸術である故もあって、時代を支配する存在となるのは、書写者の没後のケースが多いのです。在世時にも権力のある立場の人なら、少なからずそういう影響力はあるでしょうが、郭沫若のように戦意高揚のためのプロパガンダ、共産主義のプロパガンダとして、終生、意図的に用いられたケースは稀でしょう。

それは、文革期に社会的に許された書が、毛沢東と郭沫若の書に限られていたことが、如実に物語っています。

中国に於ける芸術としての書法と近未来像

共和国建国以後、書法は、周恩来によって、芸術と宣言され、その後も人民へのサービスの一環として存続しています。

硬筆が実用を担い、毛筆は芸術という文脈で進んだのは、日本と同じです。

そして現実的に在野の書は、現在も「学院派」、「江湖派」、「社会派」という分野で、芸術として進展しています。

但し、日本では芸術に変貌することで、書の文学性が弱体化する時代に入ってきましたが、中国ではその漢文という言語が母語たるゆえに、文学性は保守されています。

ただ政治の国・中国では、自由な言語表現・発言は難しいものかもしれません。歴史的にも、現在も、そのような中で、反骨の文学者として世に出た郭沫若の動向が面白いのです。

彼の時代と社会への告白としての書の在処は、現代の私たちにも必要であり、そういう意味で、いま郭沫若の書の再認識が求められているのではないのでしょうか。

文学者であり、政治家でもあった郭沫若は、その個人主義と全体主義の振幅と、それらの間で揺れ動くところの苦悩の中、書を通して何を語りたかったのか。そのような文脈も含め、彼の書は、より多義的な意味を背負いながら、未来に向け発信されるべきでしょう。

つまり、郭沫若の書は、芸術表現でもあります。より深い中国書法史の歴史遺産を網羅的に取り込んだ、「文化」の一つの結晶なのです。

第一章 日本と郭沫若 自我の覚醒と岡山・九州の時代（一九二〇年代～一九三六年）

第一節 在日時代に於ける郭沫若の思弁哲学と書の基底をなす思想の断層

——五四運動期からの郭沫若に於ける独自の儒教解釈と書の姿

思想と書

ここでは、書の表象の分析というよりも、その基底をなす郭沫若の書の背景となる思想の問題に着手します。というのは、一九二〇年代の郭の書は、管見ではほとんど発見できず、よってテーマを郭の前近代的な理学の特性と反映としての書相、さらに蒋介石との訣別の意味にしました。

書と思想の関係は、書人本人の自覚、無自覚を問わず、関係の深いものであり、些か説明が複雑で厄介でもありません。従来、余り問われなかったその構造を、伝統文人の経脈、理学者として、唯物論書法以前の郭沫若の基底をなすものと考え、できる限り詳細に見ていきたいと考えます。つまり郭沫若も、精神疾患時を中心に唯心論的な内面の精神世界で、思遊した経歴を持っています。そこに郭の近代的自我が思想的に発見できます。文学的自我の日本での覚醒については、すでに藤田梨那氏（『詩人 郭沫若と日本』武蔵野書院、二〇一七年）によって詳論されていますので、ここでは思想と書の関係性に焦点を当てます。また唯心論から唯物論へと転向する思想の交差を生々しく知ることのできる材料として、因縁浅からぬ蒋介石批判についても見ていきたいと思えます。